

カウチの上で目が覚めた。5時までは覚えていたが、それから三時間ほど眠ったようである。窓の外から朝日が差し込み、昨日と同じブルーの空が広がっていた。気温は六八度（華氏・摂氏約二〇度）。玄関ホールまで下りてアパートの扉を開ける。ほんのり白い灰が通りを覆っていたが、思っていたほど酷くなかった。ブロードウェイの角にはハムビーと呼ばれる平べったい小型ジープが止まっていた。迷彩服を着た州兵が機関銃を屋根に備え付け、キャナル・ストリートに銃口を向けている。キャナル・ストリートの検問所には人だかりが見えるが、朝日を浴びた通りには人影もまばらでクルマもない。すべての店はシャッターを下ろしたまま。ソーホーの先まですつとブロードウェイが見渡せる。時々、静寂を破って、上空から戦闘機の轟音が耳をつんざく。南のダウンタウン方向へ目をやると、上空はぽっかり空間が開いて、いつもの貿易センタービルは、もちろん、ない。空っぽの通りの先は煙で霞んで見えないが、残骸となったワールド・トレード・センターがまだ燃えていることはわかる。

それにしてもニューヨーク市警は徹底的な厳戒態勢を整えた。若い警官によると「コンデিশョン・オメガ」と呼ばれるもつともハイレベルの厳戒態勢だという。十四丁目以南は全域、犯罪発生地域として指定されたことを意味するという。

わたしは唯一開いている「ニュー・ファンシー・フード」へ食料の買出しに出かけた。キムさんはいつものようにキャッシャーで忙しそうに働いている。ニューヨーク市警の警官ばかりでなく、郊外のナッソー郡やサフォーク郡などから駆けつけた警官が列をなしている。新鮮な食料を積んだトラックがいつこの閉鎖地域に入ってくるかわからない。食料を売り尽くしてしまったら、キムさんも店を閉じるのだろうか。わたしは残っているジャガイモや人参、砂糖、ティーバッグ、トイレットペーパーのほか、パスタや冷凍ピザ、缶詰を手当たり次第集めてキャッシャーにたどり着いた。

「クレジットカードは今日使えないんですよ」

とキムさんが申し訳なさそうに言ってきた。現金払いで買い物を買ませ、角にあるキャッッシュ・マシーンで現金を引き出そうとすると、同じカードで一回、百ドルしか引き出せない。この「戦時下」では現金が貴重になってきた。何でもクレジットカードで済ませる生活にどれほど慣れてしまっていたことか……。

コーヒーを飲んでから現場に向けて出発することにした。わたしは引き出しの奥から大事に保存していたニューヨーク市警発行「ワーキング・プレス」パスを見つけた。これはニューズウィーク日本版ニューヨーク支局で働いていた時、正式に取得したもので、一九八六年と明記されている。支局の七人分を請求したが、結局、支局長のわたしにしか認可されなかった。それくらい手に入れるのは難し

くまた信頼度も高いパスなのである。一九八六年とはいえ、写真（大分若いけれど）も載っているし、首から下げていれば格好がつく。

ブロードウェイを三ブロック下がると、煙が酷くなった。買っておいいたマスクをつける。

警察に止められたので右折、チャーチ・ストリートへ。通りの両側には警察のクルマやトラックが並び、救急隊や迷彩服の州兵でゴった返していた。チェンバーズ・ストリートの一本北、リード・ストリートまで下ると、ここにはテレビ局の大型バンが並び、見慣れたキャスターがマイクをもつて生中継をしていた。この通りが報道陣の進める最前線だった。一本西側のウエスト・ブロードウェイへ行くと、ここではチェンバーズ・ストリートが最前線。五ブロック先の現場は灰色の煙に覆われたまま、よく見えない。マスクをしていても、プラスチックや金属の焼けた匂いが強烈に鼻をつく。

ダンプカーが数台、焼けた金属の残骸を載せてチェンバーズ・ストリートを東へ向かう。

若い女性リポーターが運転手さんにどこへ行くのか尋ねると、

「五十九丁目のゴミ集積所だよ」

Vサインをしながら運転手さんは大声で答えた。次のダンプカーは、二十センチくらいまでぺしゃんこになったクルマを載せていた。隣の救急隊がホースでそのクルマに水をかけた。音がして煙が上がる。ダンプの上でもクルマはまだしっかり燃えていたのだ。

チェンバーズ・ストリートを西へ行くと、ウエスト・ストリートに出る。この通りは六車線の太い幹線道路で、ブルックリン・バッテリー・トンネルへと繋がっている。ウエスト・ストリートの西側にスタイバサント高校があり、その南にはわたしがよく散歩した「ワシントン・マーケット・パーク」が広がる。ウエスト・ストリートには箱型をした屋根つきの橋がかかっている。スタイバサント橋だ。ここを上って見ると、初めてグラウンドゼロがよく見渡せた。

*二度目のテロの兆候

超高層ビル二本の残骸は六車線の幅があるウエスト・ストリートいっぱい溢れ出し、まだ煙を吐いて燃え上がっていた。十階分ほどのタワーの外壁が落ちたまま、地面に突き刺さり、異様にそそり立っている。スパゲッティのようにぐにやぐにやに曲がった鋼鉄が、床や天井、壁、窓ガラス、パイプなど、ありとあらゆる破片に絡みつき、くるみ込むようにして目の前の通りに氾濫しているのだった。とにかく百十階の二本の超高層ビルである。瓦礫と呼ぶにはあまりにも大きく、あまりにも異様な惨害の痕だった。

今朝、わたしたちがベッシー・ストリートからタワーを眺めていた時、助けを求めていた何千人という人たちが、あそこにいる。まだあの下で息をしている人がいるかもしれない。

閉鎖されたウエスト・ストリートには北のグリニッチ・ヴィレッジ方向に向かって、ダンプカーが長い列をなし待機していた。これから運び出される残骸物を運ぶためである。現場にはニューヨーク中の建設工事人が集まっているという。鋼鉄の専門家が焼けた鋼鉄を切断し、その下の生存者を探しているのである。

彼らは、オートショーなどが開かれるジャービッツ・コンベンション・センターで救出作業のボランティアを申し込み、ここに送り込まれてきていた。鉄橋の西脇にある学校で隊列を組み、現場へ向かう姿が見える。あるいは現場から戻り、灰まみれになって憔悴した顔もある。現場に近いだけあって、一帯はさらに強烈な匂いに覆われている。

四百二十メートルの高さを誇り、雄々しく空に伸びていたトレード・センター二本のタワーが、まるでパンケーキのように崩れ落ちるとは……わたしは改めて信じられない思いに駆られた。あるとき現場にいた警官も、消防士も、一九九三年の爆破事件を頭に描いていたに違いない。忘れもしない八年前の二月二十六日、地下二階の駐車場に仕掛けられた爆弾が爆発、死者六名、負傷者千名以上を出した爆破事件。

あの日の昼頃、グリニッチ・ヴィレッジのアパートにいたわたしは、救急車や警察のクルマが何台も警笛を鳴らし、騒々しく走っていくのに異変を感じた。当時、「ニューヨーク・ポスト」紙でコラムニストをしていたピートから電話が入り、爆破事件について知らされた。トレード・センターには大学時代の友人が働いていたので、ずいぶん心配したが、彼も無事だった。果敢な消火作戦と救出作業によって、被害は最小限に食い止められ、復旧工事も早かった。

あれだけの事件があったのに、何故、貿易センタービルが、再び、テロリストの標的になると誰も考えなかったのだろうか。いま、目の前で炎上する残骸を見ながら振り返ってみると、米国だけでなく世界の金融の中心地である貿易センタービルほど、テロリストにとって格好の標的もなかった、と思えてくるのだった。そのうえ、トレード・センターが二度目の巨大なテロに見舞われる兆候は、いくつも現れていたのである。

*ジハード（聖戦）に停戦などない

八年前の爆破事件で逮捕されたモハメド・サラメは、ハドソン河対岸にあるニューヨーク州ジャージー・シティに住んでいた。一九六七年九月一日、イスラエルに占領されたヨルダン河西岸のビディヤ生まれ、ヨルダン国籍をもつパレ

スチナ人である。レンタカー会社から借りた黄色のフォード製バンから足がつき、たった四百ドルの保証金の返済を求めて現れたところを逮捕された。

わたしは当時隔週で連載していた週刊文春『USA通信』の取材で、事件から一週間後にジャージー・シティを訪ね、サラメの通っていたイスラム教寺院「マズジッド・アル・サラーム」にも足を向けていた。

「マズジッド・アル・サラーム」はモスクとはいっても、一階におもちゃ屋、中華料理店、電気器具店がある古い雑居ビルの三階にあり、表からはほとんど目立たない。僅かにビルの三階の窓に「アル・サラーム」という英語とアラビア語らしい文字が見えるだけ。

このモスクはニューヨーク周辺のイスラム原理主義過激派の拠点で、盲目の指導者オマル・アブドルラーマン師がイスラム教義とイスラムの敵との戦いを説いていた。アブドルラーマン師はエジプトでサダト前大統領暗殺教唆に関与した容疑で起訴されたが、証拠不十分で無罪になり、三年前に米国へ入国、ニューヨーク周辺で多くの信徒を集めていた。

「神の敵を打ちのめし、殺してしまえ。あらゆる場所にいるあのサルとブタの末裔を、シオニズム、共産主義、帝国主義の奴らを葬り去れ。アラアの神の敵に対するジハードに停戦などない」

テープに録音されたアブドルラーマン師の説教は恐ろしく危険でありにも過激だった。

この爆破事件の後、国連本部とFBI（連邦捜査局）、ハドソン河の下を通るふたつのトンネルをほぼ同時に爆破する計画も進んでいたことが発覚。一連の事件で、アブドルラーマン師らが起訴され、サラメほか共犯とされる四人は、貿易センタービル爆破の罪で禁固二百四十年の判決を受けた。

FBIの最重要指名手配リストに名を連ねていた主犯格のラムジ・アフメド・ユーセフが、ついに逮捕されたのは一九九五年のことだった。すぐにパキスタンからニューヨークへ護送された。ヘリコプターがマンハッタン上空に差しかけたとき、護送官はユーセフの目隠しをずらし、貿易センタービルの明かりを指さしながらこう言った。

「見てみる。まだ、しつかり立っているではないか」

ユーセフはこう答えたと伝えられる。

「十分な軍事資金と爆薬があれば、とても立つてはいられなかったのになあ」

彼は米国航空会社の定期旅客機五便を太平洋上空で同時爆破する計画も練っていたことがわかった。そればかりか、爆破計画について自供し、FBIには調査官の次のような言葉が残っている。

「容疑者は貿易センタービルを標的として選び、一方のタワーを倒して隣のタワーにぶつけ、両タワーで総計二十五万人の被害者を出すつもりだった」

「(爆破事件の)被害者数は、第二次大戦中に原子爆弾の投下を受けた日本の広島と長崎を合わせた総数にマッチさせたかった」

サウジアラビアのダーランにある米軍基地に爆発物を搭載したトラックが突っ込み、十九名の兵士の命を奪ったのが、一九九六年六月二十五日。

ケニアとタンザニアの米国大使館が同時爆破され、合計二百三十一名が殺されたのが、一九九八年八月七日。

イージス艦コールがイエメンのアデン港で破壊され、十七名の死者と三十八名の負傷者を出したのが、二〇〇〇年十月十二日。

一九九三年の貿易センタービル爆破事件から、主要なものだけ拾っても、これだけ一連のテロが続いていたのに、何故、誰も次の大計画を予想できなかったのか。

イスラム急進派は、一九九三年の貿易センタービル爆破に「失敗」した一年後、枝分かれしたさまじまのグループが集まって会議を開いたといわれる。テロリスト・グループは、それから数年かかって、九月十一日のシナリオを練っていたことは間違いない。オサマ・ビンラディンがどれだけこの計画に関わっていたか、明確ではないが、テロリストたちは一九九三年の「失敗」を振り返り、周到に準備を進めていたことは疑いようもない。

*ニューヨークは立ち上がる

わたしたちは橋を下りてスタイベサント高校に行ってみた。そこは救急隊と医療隊のセンターになっていて、たくさんの人が出入りしている。水の大瓶や食料を届ける人の後ろから、憔悴した救急隊員が重い足取りで入ってくる。彼らはここで手を洗ったり、軽食をとったり、電話などして、また現場へ駆けつけるのだ。右手奥には白衣を着た医療関係者が、並んだストレッチャーの近くで薬品などの整理をしている。からっぽのストレッチャーが救助の困難さを物語るようだった。さつき、ジュリアーニ市長が六千人分のボディバッグ(遺体袋)を用意したと発表していたが、被害者の数はもつと増えるかもしれない。

ボランティアはウエスト・ストリートの四十ブロックほど北にある「チェルシー・ピア」に集まっているという。「チェルシー・ピア」というのは、ハドソン河畔に朽ち果てていた埠頭をすっかり新しく改装してできあがった一大スポーツセンターである。ここでは市民から寄せられた衣料や毛布、飲み物などが集められているという。赤十字にも多くのボランティアが集まっている。看護婦や救急救命士、元警官ばかりでなく、警察犬の元訓練士が犬を連れてきて捜索に加わっている。そういえば、ピートが昨晚、廃墟のように静まり返ったチェンバーズ・ストリートで、ひとりの女性に出会ったと言っていた。

「スタイバサント高校はどこでしょうか？」

ウエスト・ストリートの方を指さすと、わたしは看護婦なので駆けつけたので、と言い残し、暗闇のなかに消えていったという。

ニューヨーカーの反応は素晴らしい。市民は近くの救世軍支部に衣料や飲み物などを届け、近くの病院で献血を申し入れている。その列が絶えることがない。ニューヨークばかりでなく、コネティカットやニュージャーシー、マサチューセッツ、ノースカロライナ州からも、消防士が消防自動車で駆けつけている。集まった一万人以上の人がびとが、燃えつづける巨大な瓦礫のなかから、生存者を救いだそうと力を合わせているのだ。その姿を見ていると、ニューヨークは必ず立ち直る、と思えてくるのだった。

アパートに戻ってテレビをつけると、ヒラリー・クリントン上院議員がグラウンドゼロ（爆破地点）でリポーターに答える姿が目に入った。彼女は今朝、ワシントンから駆けつけ、その足で現場へ急行、ヘリコプターに乗って上空から視察したという。ジュリアーニ市長が隣からコメントを補う。休みなく全体の指揮を取る市長は眠る時間もないだろう。消防士、警官、救急隊、医療隊、ボランティアなど全員が一丸となって、生存者の救出に全力を尽くすこの一大オペレーションは実に整然と手際よく組織されている。市長は矢継ぎ早に指令を出し、記者会見を開き、実に精力的に動き回っている。ほんの数日前までは、妻との別居問題やガールフレンドとの関係などですっかり憔悴した顔つきだった。それに前立腺ガンも抱えている。しかし、現場の指揮を取る市長は、まるで生き返ったような顔つきで力を発揮し、実に頼もしい市長であることは言うまでもない。ヒラリーの対応も適切で、もうすっかりニューヨークの上院議員らしくなってきた。

あの破壊の跡を見て帰った後でも、未だ貿易センタービルがテロ攻撃で崩壊したなどわたしには信じられない思いだった。昨日からテレビや新聞は「ヴァルネラブル」（脆弱）という言葉が頻繁に使うようになった。米国は外敵から襲われることは絶対がない、と思っていた確信が崩れた。ウエスト・ストリートに溢れ出していたあの巨大な瓦礫同様、アメリカ人の安全への確信は、ずたずたに引き裂かれたのである。もうどこにいても安全ではないという不安感がこの国全体に重くのしかかっている。ハイジャック犯の凶器はカミソリだった、と初めてニュースが報道した。今となつては、機内に持ち込まれたカミソリと自殺をいとわないテロリスト数人の意志力にこの国が簡単に負けたことがわかる。

「いちばん恐ろしいのはミサイルでなく、テロだつてことが証明されたんだ」
スタイバサント橋で会った知り合いのカメラマンも言っていた。

「何百億ドルものミサイル網を提案している時、カミソリでやられたんだから、頭隠して尻隠さず、まさにそんな感じだ」

ピートが隣で誰かに電話でこう話している。彼は「ツイード・コート・ハウス」

でのミーティングから、チェンバーズ・ストリートで目撃した南タワーの爆発、崩壊までを何度こうやって電話でみんなに話しているのだろうか。

「いや、飛行機を見たわけではない。二機目はニュージャージー側からまわり込むようにしてぶつかっていっただろう。チェンバーズ・ストリートからだど機影は見えなかった。でも、爆発は凄かったよ」

*バンコックからもEメール

わたしは思わず立ち上がった。

「飛行機は見えていなかったの？」

彼はわたしを制するようにまだ電話に夢中。昨日、アパートに飛んで帰ってきたからずっと、わたしは彼が二機目の飛行機を目撃したとばかり思っていたのだ。Eメールで多くの友人にそう伝えてしまった。

わたしは早速、コンピュータの電源を入れ、Eメールに繋いでみた。昨日送った「ウォー・ゾーンからの速報」メールを受け取った友人から、たくさんの返事が来ている。わたしたちの無事が確認できたと喜んでくれてるし、わたしにとってこれほどの励みもない。Eメールの威力を改めて痛感する。今朝、東京の母と話してから、国際電話は回線がいっぱいで不通になっているから、なおさらだ。

「無事なので安心しました。バンコック時間午後八時少し前にニュースを見るとBBCをつけたところ、先ず目に入ったのが高層ビルが燃えている画像。何が何だかわからなかったが、ワールド・トレード・センターと言っているので、よく見たら見覚えのあるビル。それから三時間以上テレビの画面にくぎ付けになっちゃいました。

あなたのことが思い出され、田舎に避難していれば良いが、と思っていました。大変な惨事です。こんなことができる非道な人間がいるとは信じられませんでしたが、これが現実とは。

これからがたいへんです。米国向けの輸出に影響が出て来るでしょう。送金決済に支障が出て来るかもしれません。商品市況がどのように動くか読まねばなりません。

バンコックでは米国大使館前の約一キロの道が封鎖されてしまい、交通が混乱しています」

ある商社のバンコック支社で働く学生時代の友人から。

「昨夜はテレビに釘付けでした。メールをいただいてほっとしました。それにしても、これは戦争ですね。くれぐれも御身大切に。先週、無事ケニアから戻りました。ナイロビでも、米大使館の爆破跡が更地で残されており、米国は郊外に要塞のような新大使館を建設中でした」

ニューヨーク支局勤務だった元新聞記者の知り合いから。
早速、原稿依頼をしてくれた親しい編集者もいる。わたしは間違いを訂正するため「ウォー・ゾーンからの速報4」を送ることにした。

「9月12日4・55PM

From War Zone 4

速報4

9月12日快晴。眠れない夜を過ごし、朝を迎えると、再び信じられないような青空が広がっていました。しかし、現場ではまだ火災が続いていて、わが家の上空も、灰色に黄色の混じった煙に覆われています。……ハドソン河沿いのウエスト・ストリートに出ると、そこからまだ火を噴いている建物や山のような残骸がよく見えました。ニューヨーク市はボランティアを集め、ステイールの工事専門家は現場へ急行しています。現場ではステイールを切断して、瓦礫の下に生存している人たちを探しているところです。このほか、看護婦、医師などが集まり力を合わせています。こういうところはニューヨークという街の本当に良いところだと痛感しました。

お返事メールを下さった方、ありがとうございます。速報1でピートが二機目の飛行機がWTCに突っ込み爆発するところを見たとき書きましたが、爆発は見えていても飛行機は見えなかったとのこと。訂正させていただきます」

*近くで開かれていたテロ裁判

毎日新聞北米総局の中井良則さんはメールに続いて、ワシントンから電話してくれた。

「今晚、一本書きましよう」

口からこんな言葉が出てきたのには、自分でも驚いた。ピートは「ニューヨーク・デイリー・ニューズ」紙のコラム執筆が終わると、「ビル・モイヤーズ・ショー」というテレビ・ニュース番組に呼ばれて、出かけて行った。ビル・モイヤーズというのはリンドン・ジョンソン大統領の報道官だったジャーナリストだ。昔からの知り合いに頼まれると、嫌とは言えない性格なのである。

コンピュータに向かって文字を打ち始めても、まだ昨朝のことが信じられない。すべてが悪夢だったように思えてきて、自分の原稿が現実離れしているような変な錯覚に陥る。

「現在、米国はどんな手段でも報復を行うと発表している。ホワイトハウスの新しい主の顔を見ていると、われわれは最悪の事態に見舞われるのだろうか」と心配になってくる」

こう締めくくつてもう一度読み直しているうちに、ピートのテレビ出演を見逃してしまった。コマーシャルなしの二十四時間報道はまだこの局でも続いている。クルマの騒音も人声もしない完璧な夜の静寂のなかで、ひとり呆然とテレビの画像を見つめていると、突然、その顔が現れたのである。

テロ容疑者モハメド・アタ。黒髪の四角い顔をしたアラブ系の顔で、太い眉の下の三白眼が強烈な憎悪を発散させている。大きな鼻としっかり結んだ薄い唇は、「断固決行」とでも言うように強い意志と行動力を窺わせる。FBIがどんなに望んでも、これほど凶悪な容疑者の顔写真は手に入らないのではないか、と思わせる写真だった。そのアタはもうひとりのアラブ系男性とフロリダに住み、タンパから八十マイル南にあるヴェニスで飛行機操縦学校に通っていたというのだった。二人はボストンを発ちハイジャックされた便に搭乗していたというのである。

画面を大きく飾るその顔を見ながら、わたしはわが家からほんの数ブロック先のセンター・ストリートにある連邦地裁で、ケニア、タンザニア米大使館同時爆破テロの実行容疑で起訴された四人の裁判が行われていたことを思い出した。一九九八年に起こった大使館同時テロの背後では、オサマ・ビンラディンが糸を引いていたとされ、公判ではビンラディンのテロ組織「アルカイダ」の元メンバーが証言台に立っていた。

そんな裁判がニューヨークで行われていることにわたしは不安を抱いていた。同時に、公判を傍聴しに行こうと思いつきながら、結局、行かなかったのである。日本の雑誌メディアは、どこもそんな記事に興味を示さないだろうと高をくくっていたことがひとつ、また実際に取材しても発表させてくれる媒体がなかったことも確かだろう。

米国のメディアもこの裁判をほとんど無視した。僅かに「ニューヨーク・タイムズ」紙が報道していたが、話題にもならなかった。当時の米国は、ラップ・ミュージックの黒人プロデューサーとして有名なパフィ・コンムの関わった銃撃事件や、クリントン大統領によって恩赦を受けた投資家マーク・リッチの前妻デニス・リッチ問題、そして行方不明になった研修生とコンディット下院議員のスキヤンダルなどに大きな関心を寄せていた。その裏でこんなに周到な同時多発テロ計画が進み、モハメド・アタなど数名がジェット機の操縦を学んでいたのである。

ピートは夜遅くなつて帰宅した。テレビ局からデイリー・ニューズのオフィスに寄つて、二日分の新聞を抱えてきてくれた。新鮮なベールも買ってきてくれた。編集長のクルマで十四丁目まで送ってもらったというが、検問でひっかかり時間がかかったという。十四丁目以南にクルマは入れず、あそこから徒歩で二十分以上もかかったという。

「閉鎖地区に住んでいるという証明を見せろ、と言われても、何も持っていない

んだ。説得するのに時間がかかったよ」

考えてみれば、現住所を証明できるものはほとんどない。住所はキャナル・ストリート郵便局の私書箱のものを使っているからである。郵便物が多く、家を空けることの多いわたしたちは、面倒を承知で私書箱を使っている。毎朝、郵便局まで郵便物を取りにいかなくてはならないが、旅行しても郵便物はきちんと保管してもらえる。わたしは請求書の入ったファイルを総ざらいして電気料金の請求書に現住所が明記されていることを発見した。明日からこの請求書をもって歩かなくてはならない。

ベッドに入ってもまた眠れない。モハメド・アタの顔が浮かんできて、彼がジェット機を操縦している恐ろしい姿が現れては消える。そして爆発する南タワー、頭上に襲ってくる鉛色の煙ときらきら光る物体。ピートがいない。隣にいたはずのピートがいつの間にかどこかへ行ってしまった……。夢と現実が交じり合いながら、たくさんの映像が頭に浮かんで消える。3時が過ぎ、4時が過ぎ……。